

新出・奈良絵本『女郎花物語』の紹介

野 中 和 孝

一、書誌について

まず新出・奈良絵本『女郎花物語』の書誌を紹介する。

桐の箱の中央に「女郎花物語」と墨書されている。箱から文書にわたり虫食による破損があるが、文書の本文読解には支障はない。

文書は全三冊。外題は「女郎花物語 上(中・下)」。左上に題簽が貼られている。内題はない。表紙は紺地金泥の松竹・鶴亀などの模様。縦二四糎・横一七・七糎。金箔の見返しがある。本文料紙は楮斐混漉。墨付一一七丁(上中下それぞれ三七丁、四〇丁、四〇丁)。一面一〇行、和歌は二字下げの二行書き(不定形の第一句のみ三行書き)。

本書の特徴は極彩色の挿絵二〇頁(上七頁、中六頁、下七頁)があることである。序文跋文は万治四年版本と同じであるが、ともに著名がない。奥書はなく、書写者・書写年代は不明である。

さて、本文の異同について、万治四年版本(注1)と比較すると、次のことが明らかである。本文はB系統本であるが、五二節本文「又一条のるんの御とき二月のつこもり」から「かうろほうの雪ハすたれをかゝけてみるとある心にてミすを巻あげ侍り」の一丁分が三八節中に異同している。句読点・濁点はなく、ルビも少ない。挿絵は同系統本より八頁分少ない(古典文庫所載の同系統本の上四、同八、中二、同八、同九、下三、同四、同八が欠落)。

二、本文の異同について

新出本と万治四年版本（古典文庫本）との異同を示す。（下段は版本本文）

○上巻

- ① 沖つ鳥かもつくしまにわかいねしいもハわすれしよのことくに（5オ）
- ② 其のちさくや姫にゝきのみことにまミえてかくミこをはらめるよし（6オ）
- ③ 女なとハよくめをとめてみならひあるへきもの也（10オ）
- ④ 此京の五条におはします（10オ）
- ⑤ 国司のしわさをろそかなりとてきミはらたち給へるに（10ウ）
- ⑥ わかふるさとくわいけいといふ所を知行してかへりけるとき（22オ）

○中巻

- ① むかしのをんなはかくゆうにやさしく侍りき（3オ）
- ② はやなんちらもこゝには見えきたらしなとゝえれは（7ウ）
- ③ さてこそさかなものゝきたのかたとハむらさきふのかきをき侍りけめ（11ウ）
- ④ 奚齊姜といひけるはらに申市とて嫡子ありけり（15ウ）

⑤ もろこしにけんさうと申けるみかとの御ときやうきひにそはめられて六十年か
 ほとミかともつかへたてまつらす一生むなしきとこにむかひて夜をあかし」

ら

ナシ

とゝ

ナシ

おほきみ

は

そ

ナシ

しきふ

齊と卓子とをうみ侍りきそそのさきの夫人齊姜

日をくらしわひて春ゆき秋すくるもしらてたゝほうせんとしてなんありける

(28ウー29オ)

⑥かねてはんせうとおなしくるまにのりてミゆき給はん (31ウ)

しよう

⑦すへて女はうハさのミ物見たけくさはかきやうにハあるましくこそ (40オ)

か

○下巻

①天命をもをハらすしてよこさまの死にしたる人ハ行きさきの世のつミいとふかく侍るとか (10オー10ウ)

ゆき

②けさこせんは鳥羽のこひつかこれなりといひつたふるハマことにや (11オ)

かするしは

③建礼門院に右京大夫とて侍しハ藤原伊行むすめ也 (13ウ)

行の

④平家ほろひて後又こと方の宮つかへハせしとひきこもり侍しに去へき人々さり

とて

かたくはからふ事有て年へておもひの外なる宮つかへして後鳥羽院の帝に侍し

いひはからふ

時 (13ウ)

⑤このかた五代の勅撰にあひてうたかすあまた入たる人ハ一生不犯の禅尼としてほけきやう数万部 (すまんぶ) よミつるなりいとありがたきわさなるへし

すぶ

(17ウ)

⑥親にさやうに物をおもはせ侍らんハ不孝のいたりこそ侍る (25ウ)

こそ

⑦むかし衛の定公の夫人定姜 (ていきやう) といひし人 (31ウ)

けう

⑧彼いたつらにやしなひたてるおとなしくなりての世に (36オ)

ゝ

⑨ 人の子のさかしく芸能につけてもくらからぬ中にかたをならへん (36オ)

⑩ すへて世にたくひおほく侍れはわか身をよくつゝしおさめてさて子をよき道にをしへなし」つゝ (36ウー37オ)

⑪ いひさかなきににたるつらすこしかるめ侍らんとよ (40オ)

く
たかく名ある人々おほかたは其は、
のをしへによれるたくひ
み

三、本文の差し替えの可能性について

新出本には本文の差し替え箇所が中巻に一丁分 (33オー33ウ) 見いだされる。これは保存処置等の折の差し替えと思われる。この差し替えが意図的なのか、またはそうではないのかは即断できない。そこでまず、本文内容を吟味するところから検証してみたい。

中巻の当該箇所の本文は次の通りである。

又㉒一条のゐんの御とき二月のつこもり風ふき雪すこしふりけるに宰相中将すこしはるあるこゝちこそすれといふ事をとのもりつかさしていひをこせて此いらへとくゝとありしに清少納言そらさむミ花にまかへてちる雪にとひやりければいといミしくめてゝとしかたの中将なとうへに申あけて掌侍になさんなど心得たらんあしかるましき事にやあらんわさとさしいてゝいはんこそつきなからめ折ふし」にしたかひて興をもよほす事もあるへき也すへて何わさもよき事とならほこゝろ得てあしき事なかるへし㉓おなし清少納言一条院の御まへにさふらひけるに雪のおもしろくふりたるを御らんして香炉峯もいかゝあらんなどミかとのの給はせければ清少納言やかて御まへのミすをまきあげ侍けるにいミしく感せさせ給しとかやこれは白樂天の詩に遺愛寺の鐘は枕をそはたてゝ聞かうろほうの雪ハすたれをかゝけてミるとある心にてみすを巻あげ侍り

(中巻33オー33ウ)

ここには『枕草子』（三卷本系統本）の第一〇六段と第二九九段の二段の内容を取り入れている。ともに御所に雪が降りつめたことをテーマとしているが、[Ⓐ]の波線部には作者の感想を付記し、[Ⓑ]の波線部には同じく出典としての漢籍を付記している。

新出本中巻では、当該箇所直前に、「すへて女子の手かゝさらんハむけのわさなるへしさては哥よむ事けいには琴などならふへきわさにや」（32ウ）の本文がある。同じく直後に、挿絵（中巻〔七〕）《琴を弾く姫君と手前に上臈女房、庭には池と苔・松》（34オ）があり、その後次に次の本文がくる。

哥ハ和国の風俗教誡のはしめといへはよろづのものゝあハれもなさけもこのミちならてハよくしりかたし琴ひく事などハ人によりてしらてもくるしかるましかれとよき人の北のかたなどにてあらん人の物さひしき雨の日つれくらん夕くれなとにひとりつくくとのミ物おもひるたらまほしかハあるハあちくなくよからぬ心もこそいてき侍らめあるはおもひくつしたるつもりくるしきやまひになる事も侍る物なれはさやうの折ふし」など何となくかきならしつゝはかなき心をなくさめまきらハさんたよりもいとあしかるまじきすさひなるへし（中巻34ウー35オ）

直前の文に歌を詠むことと琴ならうことをあげ、挿絵をはさんで直後の文にそれらと道とのかかわりを説くことでは、当該箇所の挿入には際立った違和感はない。

ところが、新出本下巻ではどうか。万治四年版本の当該箇所前後を見てみると、直前に天曆の亭と「しげのゝないし」との連歌がある。そして、直後に、挿絵（下巻〔四〕）《立ち姿の君と琵琶を弾く姫君、周りに御簾・几帳・襖絵・格子、手前に姫君の娘子》（23ウ）があり、その後次に次の本文がくる。

この少納言の枕双紙といふ物かけるこそわかつてうのおとこ文字さまくあれとおさくまさる物すくなかるへきことのはなれ紫式部の源氏ものかたりは此くのに至宝とさためられ侍れと枕双紙ハをとるまじき所侍らんかし女の心つ

かひにもなるへき事おほく侍れは見すハあるましき物なるへし

(下巻24才)

直前の文に連歌が示され、挿絵をはさんで直後の文に女文字の『枕草紙』と『源氏物語』を「女の心つかひ」と説くことには、説話の不連続感がぬぐえない。やはりこの箇所該当箇所を置いて読んだほうが連続性に富むのである。

このことは挿絵の解説から見ても同様になる。該当箇所を下巻に戻して考えると、新出本中巻は、歌と琴の教養のことがあって、挿絵中の〔七〕の内容となり、その後それらと道とのかかわりと続くことになる。また、同下巻は、帝と内侍との連歌の付け合いがあり、該当箇所の清少納言の宰相中将との連歌の付け合いとなり、その間(前でも後でもよい)に挿絵下巻〔四〕の内容となり、その後「女の心つかひ」と続くことになる。

以上により、新出本には一丁分の差し替えがあることは明らかである。それでは、そのことはいつ発生したのか。新出本には全巻にわたり、補修の跡が見出される。したがって、全巻を一度解体し、補修した後に、再度組み直したとき、本来下巻にあった一丁文中巻に閉じてしまった結果が、現在の新出本であると思われる。

また、組み直し後に点検すると、このことに容易に気づいたであろうが、豪華本の装丁のために、再度組みなおすということをしなかった(あるいは組み直しをせず、当該箇所のみの一丁分の貼り替えを、なんらかの理由で断念した)ことを推測させる。

四、新出本の所蔵者について

新出本の所蔵者は故中村重明・妻中村久子である。重明の祖母は高木登満(明治一五(一八八二)年生、昭和四三(一九六八)年没)。高木家は代々長崎代官の家系。元文四(一七三九)年、御用物役高木作右衛門忠與が初めて長崎代官に任命されると、以後高木家がこの職を世襲している。『長崎志続編』卷二の「御料地高井ニ諸築地架造等之部」

によると、明和五（一七六八）年に「長崎代官高木作右衛門」（肥前国彼杵郡高米郡の内の七ヶ村の御預役）の名が初出する。これ以後、天明三（一七八三）年に「高木菊次郎」（浦上村渕ノ内の三石九斗六升一合の地所の検地役）、天保四（一八三三）年に「高木榮太郎」（筑前国怡土郡の四千石余の別乗当分御預役）の二人の名がみえる。これらの高木家の家系は不明である。

中村久子氏の証言によると、『女郎花物語』の文書は重明の祖母、高木登満が嫁入り本として中村家に持ち込んだもので、それが今日まで御蔵の櫃の中に保存されていた。昭和二〇（一九四五）年の原爆被害の折も、幸いに損失することとはなかった。戦後に御蔵の改築を行った際に、この文書を発見したという。

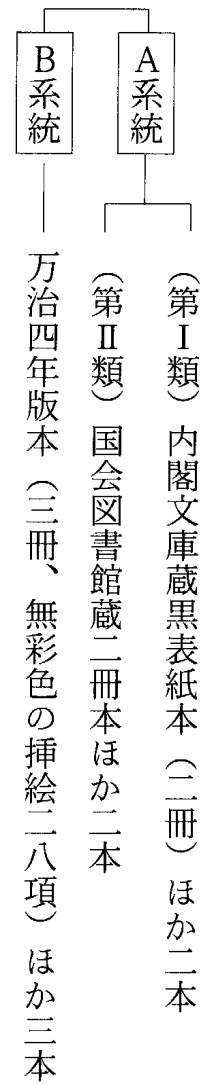
したがって、どういう経路で高木家が入手したのかは不明である。ただ、なんらかのルートで高木家にこの文書が紹介され、その後入手されたものと思われる。

五、おわりに

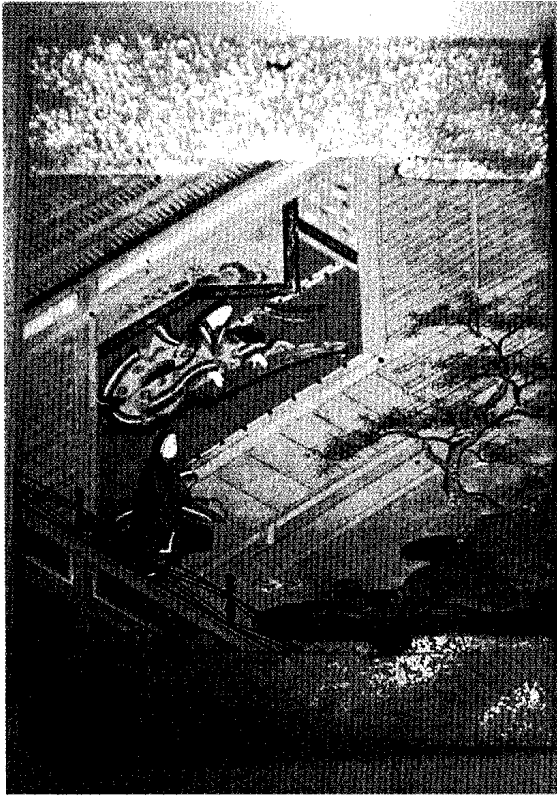
新出・奈良絵本『女郎花物語』（全三冊）の資料的価値は、さらなる文献学的な考証を経て、書写者及び挿絵の絵師の決定がなされると、ますます高くなるであろう。また、その版本及び写本の関連や諸本の系統づけにも、何らかの形で役に立つことと思う。

今回の新出本の紹介が『女郎花物語』の研究に役立つことを期して、後稿を俟ちたい。

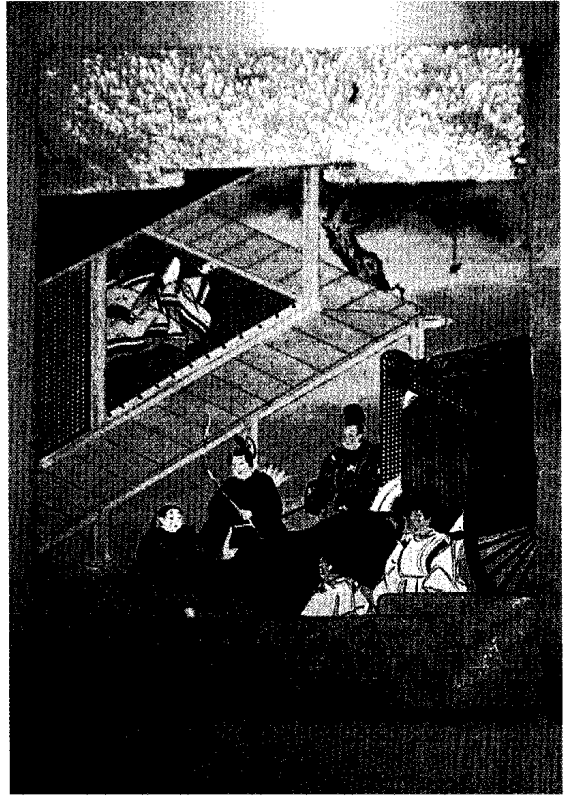
（注1）古典文庫の解説（佐藤りつ氏執筆）により、系統図を示しておく。ただし、A系統本は「版本」と異本関係の写本系、B系統は「版本系」。ただし、「板本」は「版本」に改め統一した。



(付記) 今回、所蔵者の中村久子氏の御好意により、文書の写真掲載を許可され、次頁(上段が新出本の挿絵、下段が万治四年版本の挿絵)に示した。ここにお礼申し上げます。



中巻〔四〕(34才)



上巻〔二〕(8才)

